



Vol. 13

日本ウミスズメ類研究会 (Japan Alcid Society) 会報 1997年1月27日発行



油流出事故における会の動きと今後の予定

新春早々日本海で起きた油流出事故は、テレビや新聞報道等でみなさん十分にご存じのことと思います。日本ウミスズメ類研究会は、国内では唯一の海鳥研究団体であり、事故当初から海鳥の保護・研究に関わってきました。研究会の行動の根底は「被害規模の記録と推定」にあります。今回のような事故を二度と起こさないための努力と、今後の環境再生のための計画、行動が必要です。

会員みなさんに、重油事故発生以来23日までの会の動きと、今後の行動予定についてお知らせします。

1. これまでの動き

1月5日 (日)

- ・油汚染海鳥被害委員会 (Oiled Bird Information Committee ; OBIC) を準備、各幹事に連絡する。
- ・アメリカのPSG日本海鳥保護委員会前委員長のHarry Carter氏とJohn Piatt博士に連絡する。

6日 (月)

- ・Harry Carter氏より返事。
- ・6日付で各幹事の了解のもと、OBIC発足。
- ・会員に「緊急！ 島根・隠岐諸島沖でのタンカー沈没、重油流出事故について」を送付。

7日 (火)

- ・アメリカのPSG日本海鳥保護委員会前委員長のHarry Carter氏とJohn Piatt博士に2度目の連絡をする。
- ・関係各方面にFAX、またはメール (日本野鳥の会、WWF、日本鳥類保護連盟、環境庁、野生動物救護獣医師協会)。OBICの動きを伝える。
- ・メーリングリストにて、OBICのニュースレター第1号送付。同時に、ニフティなどへの書き込みをする。

8日 (水)

- ・関係各方面と調整する。
- ・Harry Carter氏より返事。

9日（木）

- ・日本野鳥の会事務局に、小野およびJohn Friesが赴く。野鳥の会にOBICへの加入を依頼し、同時に現在のOBICから、事務局を野鳥の会にうつした新OBICの発足を提案する。
- ・新OBICの発足に伴い、これまでのOBICを解散する。
- ・ロシアの研究者にメール。

10日（金）

- ・環境庁に、小野およびJohn Friesと、野鳥の会より上原が赴く。OBICについて、環境庁を中心とした委員会とするよう、要請。
- ・死体の集積を環境庁に要請。

11日（土）～14日（火）

- ・OBICの体制について提示するとともに、死体回収システム、識別者の派遣などについて、提起。関係各方面と調整。
- ・14日までにOBICのニュースレターを12回流す（ご希望の方は事務局まで）。
- ・ロシアの研究者より返事（後述）。

15日（水）

- ・アメリカよりHarry Carter, Roger Helm, Scott Newmanら、研究者来日（16時）。
 - ・OBIC事務局（野鳥の会）において、OBIC会議（19時～23時）。
- 環境庁、野生動物救護獣医師協会、日本鳥類保護連盟、山階鳥類研究所、日本ウミスズメ類研究会など関係団体、および個人のメンバーが参加。

16日（木）

- ・9時50分、羽田空港から、石川県小松空港へ。
 - ・金沢市の県野鳥園にて、Scott Newman（通訳John Fries）が、県内で海鳥の救護にあっている獣医師らを対象に、最新の救護技術の講習を行う。
- これより後、Scott Newmanは、野生動物救護獣医師協会の野村氏とともに別スケジュールで行動。
- ・Harry Carter、Roger Helm、小野、佐藤は、加賀市鴨池サンクチュアリセンターに移動し、同センターレンジャーの大畑孝二氏とともに片野海岸にて、被害状況調査。
 - ・夕方、John Fries、獣医の竹村氏と合流。簡単なミーティング。
 - ・石川県加賀市に宿泊。

参加者略歴

Harry Carter :

米国地質調査所 西海岸の海鳥調査専門家

Pacific Seabird Group日本海鳥保護委員会前委員長

"Numbers of seabirds killed or debilitated in the 1986 Apex Houston oil spill in central California."
（共著）などの論文で知られる。

Roger Helm, Ph. D. :

米国魚類野生生物局 西海岸の油流出事故対策の専門家

Scott Newman, DVM :

カルフォルニア大学デイビス校の獣医師

海鳥治療専門の獣医

小野宏治：

Pacific Seabird Group日本海鳥保護委員会委員長
日本ウミスズメ類研究会幹事 東邦大学理学部博士課程

John Fries：

Pacific Seabird Group日本海鳥保護委員会委員長
日本ウミスズメ類研究会会員 東邦大学理学部国費訪問研究員

佐藤美穂子：

日本ウミスズメ類研究会会員 東邦大学理学部海洋生物学研究室

高橋正弘：

日本ウミスズメ類研究会会員 埼玉大学

17日（金）

- ・鴨池サンクチュアリセンターの大畑氏とミーティング。
 - ・船首が座礁している三国町の海岸の状況を視察。
- 大畑氏と別れ、越前海岸を南下しながら一部の海岸を被害状況調査。
- ・海鳥被害調査のためのフォーマットを試作する。
 - ・福井県敦賀市に宿泊。

18日（土）

- ・高橋正弘氏が合流。
- ・試作した調査フォーマットに基づき、敦賀半島西側の数カ所で被害状況調査。
- ・若狭湾を西へ移動しながら、小浜湾、高浜町などで被害状況調査。
- ・現地で被害状況調査を行っている高校教師の狩野清貴氏とミーティング。
- ・京都市舞鶴市に宿泊。

19日（日）

- ・日本野鳥の会京都支部、大阪支部の方々や、野鳥研究家の須川 恒氏、日本野鳥の会鳥と緑の情報センターの丸谷聡氏らと合流、丹後半島の北西側海岸の被害状況調査に参加。
- ・京都市内に移動。東京へ戻る。

20日（月）

- ・OBIC事務局（野鳥の会）で、21日のOBIC会議のための資料作成（Carter, Helm, Fries, 佐藤）。

21日（火）

- ・10時～12時、OBIC会議（環境庁）
（おもに、アメリカの専門家らによるプレゼンテーション）
- ・14時～17時、OBIC会議（参加団体による。WWF事務局にて）
- ・夜まで、野鳥の会事務局にて、調査用紙の作成（OBIC推奨フォーム）

22日（水）

- ・参議院議員の堂本暁子氏と朝食会（Carter, Helm, Newman, Fries, 塚本、小野）。
- ・環境庁にあいさつ（Carter, Helm, Newman, Fries, 小野）。

- ・ Roger Helm、Harry Carter帰国。空港まで見送る。

23日（木）

- ・ 調査方法について、まとめる（OBICからの発信文書原案）。
 - ・ 「死体の重要性とお願い」という文書、原案作成（環境庁、OBICからの発信文書原案）
-

2. これまでの発信文書

~~~~~  
**海鳥被害調査についての重要性とお願い**

1997年（平成9年）1月15日

日本ウミスズメ類研究会  
（代表・青山莞爾）  
Pacific Seabird Group日本海鳥保護委員会  
（代表・小野宏治、John Fries）

油流出事故は、漁業資源のみならず、海洋環境に多大な影響を与えます。漁業への被害は、経済活動と密接に連携しているために最も注目される部分です。つぎに、海岸の景観については、各自治体により、重油の回収を含む措置がとられることと思います。

これらの問題に比べ、海鳥への被害は、ニュース素材のひとつとして扱われる程度で、実際にその被害規模などを推定した例は、日本ではほとんどありません。

**海鳥は**、プランクトンから魚にいたるまで幅広い栄養段階の食物を摂取し、採餌場所も沿岸から沖合いまでと、海洋生態系の中では主要な位置を占めています。したがって、**被害の規模や海洋生態系への影響、そして、その後の環境回復のための賠償問題を検討する上で、非常に重要な存在です。**

我々が海鳥のためにまずしなければならないことは救急の医療体制ですが、つぎにしなければならないことは今回の事故の正確な記録を残すことです。鳥の種類、数、場所、状態などを正確かつ確実に記録することが、事故の規模を推定するためにきわめて重要です。事故に遭った海鳥の中には世界的に絶滅に瀕している海鳥も含まれており、今後の環境再生に向けて、我々は努力しなければなりません。

現在、おもに漁業関係者の手により海岸での重油の回収作業が行われていますが、そうした際、重油の付着した海鳥の死体は、そのまま焼却処分される可能性が高いと思われます。そのため、事故の規模が過小評価される可能性が生じています。

関係各機関は、死体の収集につとめるとともに、地元の鳥関係者を通じて詳細な記録を残すことができるよう、回収作業に従事している人々に連絡徹底のほど、お願いいたします。

平成7年12月15日、油汚染事件への準備及び対応のための国家的な緊急時計画が閣議決定されました。このなかで「環境庁及び水産庁は、海上保安庁その他の関係行政機関、関係地方公共団体等からの情報に基づき、当該油汚染事件が野生生物及び漁業資源に及ぼす影響の評価を行い、これを、野生生物の保護、漁場等の保全等の対策の決定に反映させるとともに、その他の対策の実施に資するよう、速やかに海上保安庁その他の関係行政機関等に提供する。」（第4節 油汚染事件の評価）と明記されており、正確な影響評価のために、関係各機関が尽力されるよう、お願いいたします。

油にまみれた死体の識別は難しく、とくに危急種に指定され世界的にもっとも絶滅の恐れのあるカンムリウミスズメと、ウミスズメの識別、また、国内絶滅危惧種に指定されているウミガラスとハシブトウミガラスの識別など、専門家の手により詳しく調べる必要のある種も含まれます。

したがって、これらの種の識別と被害規模の推定のため、死体の保存と集積を関係各機関にお願いいたします。これらの死体の受け入れ体制については、油汚染海鳥被害委員会（OBIC）事務局（電話03-3463-8997、FAX03-3463-8844）が緊急に準備しており、あらためてお知らせいたします。

~~~~~

3. 今後の活動

研究会は、現OBICの母体を作るとともに、現OBICのなかでメンバーの一員として動いています。これまでに、アメリカからの研究者3人の招聘（費用は将来的にOBICで負担される予定ですが、現在のところ研究会が出しています。また、実際の招聘にあたっては、PSG日本海鳥保護委員会のつながりで連絡しました。）と案内、識別者の派遣（沼津の原徹さん）を行っています。また、関係各方面に出される文書や、調査のための推奨フォーマットの作成、調査マニュアルの一部についても研究会が発信しています。

今後、死体は大井野鳥公園に集積される予定で、計測と標本整理のためのボランティアを募集しています。FAX、手紙、またはメールにて、

〒136 江東区亀戸2-6-4-214 小野宏治 Tel&Fax 03-3685-6463
kojiono@gol.com, HCB00437@niftyserve.or.jp

までお願いします。

死体の回収については、なかなか理解しにくい部分だと思えます。死体を集積することの意義は、つぎのとおりです。

1. 種の確定

油にまみれた死体の識別は難しく、とくに危急種に指定され世界的にもっとも絶滅の恐れのあるカンムリウミスズメと、ウミスズメの識別、また、国内絶滅危惧種に指定されているウミガラスとハシブトウミガラスの識別など、専門家の手により詳しく調べる必要のある種も含まれます。とくに、カンムリウミスズメについては、これまで図鑑で示された羽衣とは異なり、冬羽がウミスズメと酷似している可能性のあることが示唆されています（小野・河野、未発表）。

計測は、計測者による誤差を最小にするため、原則として一人で行うべきです。わずか数mmの違いが、種の違いにつながるからです。

2. 年齢の推定

生殖線の大きさと計測値とを合わせることにより、種によってはおおよその年齢が特定できます。これは、今回の油流出事故が、地域個体群にどのくらいの影響を与えたのかを調べる上で、とても重要です。

海鳥は、ふつう”少産少死”であるため、このような事故がひとたび起きると、なかなか個体群は回復しません。きちんと被害を推定することで、その後の環境再生につなげていく必要があるのです。

3. 生理学的研究

その個体がなぜ死んだのか、また、環境にどう影響を与えたのかを知るため、死体の組織学的、生理学的研究も必要です。

これらのことは、いずれも被害の規模を正しく記録し、推定し、そしてその後何十年もかかる環境再生につなげていくために、必要不可欠です。

一般には鳥の救護に重点が置かれることが多いのですが、海鳥に関わる者として私たちがしなければならないのは、「どうしたら元にもどせるか」です。長期的な視点で考えていかなければなりません。

4. 今回の油流出事故で影響が懸念される繁殖地について

油の流出により、直接的な被害が懸念されるのは、石川県七つ島と、京都府冠島、沓島です。

石川県七つ島はカンムリウミスズメの繁殖地の北限として知られています。また、京都府冠島北にある沓島もカンムリウミスズメの繁殖が確認されています。冠島自身はオオミズナギドリの繁殖地として有名です。

この2つの島でのカンムリウミスズメの繁殖個体数は、よくわかっていません。

研究会では、今回の事故に伴い、早急に繁殖現状調査を行うよう、環境庁に要請しました。環境庁では2月より毎月、石川県七つ島で現状調査を行う旨の発言がありました。

これらの島以外に、日本海側ではカンムリウミスズメの繁殖地として、福岡県小屋島、鳥帽子島、机島、韓国全羅南道九屈島が知られ、ウミスズメの繁殖の可能性のある島として山形県飛島が知られています。また、北海道天売島は、ウトウやケイマフリなどの繁殖地として有名です。事故が長期化すれば、こうした繁殖地の個体群にも影響を及ぼすことが懸念され、研究会では今年度以降も継続して繁殖現状調査を行っていく方針です。

5. 研究会の活動費について

研究会の通常の手持ち資金は、わずか10数万円です。にもかかわらず、今回、このような活動ができたのは、さる方からの高額なご寄付によるものです。紙上を借りて、改めてお礼申し上げます。

研究会のこれまでの活動については、OBICの活動と一致していますので、一部はOBICの募金のなかで補われることかと思えます。これは、日本野鳥の会のほうで募金を集めています。（口座名義：日本野鳥の会OBIC募金、郵便振替番号：00130-7-350734）

しかしながら、今後、研究会独自の活動が生じた場合、会の手持ち資金で賄わなければなりません。

研究会では、今回のご寄付を「海鳥研究・保護基金」として積み上げ、今後の幅広い活動の費用として使っていきたいと考えています。よろしくご協力下さい。

まだ口座は開いていませんが、従来の口座（口座名・日本ウミスズメ類研究会、口座番号00170-1-580492）の通信欄に、「海鳥研究・保護基金」と明記していただければ、基金分として活用いたします。基金の会計については、すべて会報上で報告いたします。

また、今回の事故で、実際の海鳥の救護にあたっている獣医師団体、野生動物救護獣医師協会（WRV）があります。WRVでは、ウトナイ湖に保護・放鳥のための施設を作ったりしており、いわば今回の事故の「最前線」で活躍しています。こちらの募金先は（口座名・'97油汚染生物救援募金、口座番号00120-2-350855）です。

資金面の幅広い援助をお願いいたします。



ロシアより共同研究の申し入れ

ロシアの研究者より、つぎのような共同研究申し入れが届いています。

To: kojiono@gol.com

Organization: Vladimir N. Burkanov

From: "Nick N. Gerasimov" <NICK@marmam.kamchatka.su>

Date: Thu, 1 Jan 81 03:50:46 +1100

X-Mailer: BML [MS/DOS Beauty Mail v.1.36]

Lines: 21

Dear Ono-san,

Thank you very much for your message of January 9. Inhabitants of Petropavlovsk-Kamchatsky were also threatened with the tanker accident because we needed this oil for heating in our houses. I think the establishment of the OBIC is very useful for seabird protection and so I'll send you information on oiled birds if I get some data.

I see that you are very active member of the Japan Alcid Society and so I have a proposal on seabird diet study for you and your colleagues. I have a good collection of stomachs of seabirds (ca. 4500) which were caught in salmon driftnets in the Bering Sea and Okhotsk Sea during Japanese fishing operations. We collected the seabird stomachs in May-July 1994-1996 in 7 areas:

A - between 57N-166E, 59N-170E, 56N-170E, 56N-166E;

B - between 47N-153E, 48N-155E, 46N-155E;

C - between 48N-148E, 49N-149E, 48N-149E;

D - between 50N-158E, 51N-160E, 49N-160E;

E - between 52N-153E, 53N-153E, 53N-154E, 52N-156E;

F - between 56N-150E and 56N-153E;

G - between 51N-160E, 52N-162E, 51N-162E.

Most of the samples were obtained from murrelets and tufted puffins.

I propose a joint project to analyze these samples. The diet study of seabirds is new subject for me and I have no experience in work of this sort. However I am interested to learn the methods of the analysis because it is necessary for my future studies. I can discuss the project in detail if you or your colleagues are interested in the joint work. Let me know what you think about this proposal.

Sincerely, Yuri Artukhin.



マダラウミスズメ (Brachyramphus marmoratus) の声について

石田 朗

(名古屋大学農学部森林保護学研究室)

E-mail : i930017b@eds.ecip.nagoya-u.ac.jp

これまでにほとんど記載がなされていない(小野 1996) マダラウミスズメの声を確認したので報告する。

場所は、愛知県三河湾の一番奥にある宝飯郡御津町の海岸である。そこは当時、できて間もない、地面に生える草もまばらな埋め立て地で、海とはコンクリート製の垂直の護岸で仕切られていた。平成3年12月24日午前10時頃、著者がこの埋め立て地を一人で歩いていたときに、海の方から「クイツ、クイツ」という一声ずつ区切ったかん高い声がしてきた。何の声だろうと思い、埋め立て地の縁まで行ったところ、約20m離れた目の前の海上にムクドリくらい(ハトより小さく、スズメより大きい)鳥が一羽泳いでいた。嘴の先から尾にいたる上面は灰色がかった黒色で、目の後ろにぼんやりと白い部分が認められた。肩には小さいながらもはっきりとした細長い白色部があり、下面もきれいな白色であった。嘴は細く長かった。以上の特徴から、この鳥はマダラウミスズメの冬羽であると判定した。

この鳥は、さかんに目の前の海上で潜水をしていた。晴れて風がない穏やかな日であったために、海面にほとんど波はなく、双眼鏡でも水中を羽ばたいて進んでいく様子をはっきりと観察することができた。潜水が終わって、水面にでてくると次の潜水までのあいだに時折、「クイツ、クイツ」という最初に聞いた声を出していた。この声は、現在インターネットのホームページ(<http://www.muratasystem.or.jp/~kukuma/shiretoko/>)で流れている、「ピュー、ピュー」という太平洋東側に生息する基亜種(*Brachyramphus marmoratus marmoratus*)の声(繁殖地でのもの)とは、明らかに異なっていた。どちらかという、カヌムリウミスズメが海上で出すという「ピュイツ、ないしチュイツ」という声(小野私信)に似ていると思われる。

発見してからしばらくのあいだ、この鳥は目の前の海上で潜水を繰り返していたが、やがて護岸された岸に沿って泳ぎ去っていった。この間の時間はおおよそ10~15分であった。この後、たまたま近くにいた一人のバードウォッチャーにマダラウミスズメのことを告げたが、この人は鳥を発見できなかったとのことだった。

小野宏治・1996・マダラウミスズメ調査についてのQ & A・日本ウミスズメ研究会会報、12:1-3.



重油流出事故と冠島のオオミスズナギドリについて

須川 恒(冠島調査研究会)

〒601-13 京都市伏見区小栗栖中山田町12-1-1-310

TEL・FAX 075-572-1584

E-mail: CXD00117@niftyserve.or.jp

1997年1月3日、島根県隠岐諸島北東沖約100km地点でおこった「ナホトカ号」の重油流出事故は、海鳥とそれを支える生態系に、現に大きな被害を及ぼしている。京都府舞鶴市の冠島で集団営巣するオオミスズナギドリに関しても、報道関係の問い合わせ等も多いため、重油問題に冠島のオオミスズナギドリがどうかかわる可能性があるのかを、須川(1993)をもとに、急遽まとめた。冠島のオオミスズナギドリのおかれた状況の理解に活用していただきたい。(1997年1月26日)

オオミズナギドリの生活史
 オオミズナギドリはミズナギドリ目に属する鳥で、アホウドリやウミツバメの仲間である。この類の鳥類は、管鼻と呼ばれる管状の鼻を持ち、その奥に血液中の塩分濃度を調節できる塩腺があるため、淡水無しで外洋で生活できる。

オオミズナギドリは、日本、朝鮮半島、ロシア共和国極東部の近海にある離島で集団営巣している。冠島は、若狭湾内の、京都府舞鶴市に属する無人島で、南北約1.2km,東西約0.5kmある。全島はほぼ森林で覆われ、オオミズナギドリの巣穴が、いたるところに開いている。巣穴は、ほぼ水平に1mから2mもの深さがあり、産座の部分は少し広がっている。巣穴の密度は、吉田(1962)によると100m²当り約60巣、須川・百瀬(1983)では100m²当り約80~100巣である。戦前の調査(丹,1956)では、正確な密度は記録されていないが、全島にくまなく1m²当り約1巣の巣穴が分布しているといった記述から、少なくとも半世紀にわたって巣密度に大きな変化は起こっていないことがうかがえる。

表 1. 冠島におけるオオミズナギドリの営巣過程

月	旬	オオミズナギドリの繁殖過程
12		南方海域(フィリピン、パプアニュー・ギニア周辺海域等)
1		
2	上 中 下	南方海域より帰還
3	上 中 下	
4	上 中 下	巣の占有・補修
5	上 中 下	交尾期
6	上 中 下	産卵期(1卵)
7	上 中 下	抱卵期(約53日)
8	上 中 下	孵化期
9	上 中 下	育雛期
10	上 中 下	雛最大体重期
		成鳥離島期
11	上 中 下	幼鳥巣立ち・離島期 (近畿地方迷行落下)

・冠島の巣の総数の推定

冠島には100m²の区画が約2000あると考えている。吉田(1962)の100m²当り約60巣の巣密度を採用すると、60×2,000=120,000(12万巣)となる。

・日周行動

オオミズナギドリは、昼間は、地表には全く姿をみせず、また付近の海上にもあまり姿を

みせないが、夕方になるとともに島の付近に多数帰って来て付近の海面に集結して休息し、その後、逆時計まわりに島をまわる。日没後になると、島をまわっていた群れは一斉に群れを作って上昇し、島に向かって来る。オオミズナギドリは細かく方向転換して飛ぶことはできず、着地は、樹冠にぶつかって鳥が降って来るという感じになる。ただちに巣穴に入る個体も多いが、地表で過ごす個体もいる。夜明け近くになると、特定の場所への移動が始まる。オオミズナギドリは海上や平地からは十分な助走の後に飛び立つことができるが、森林の地上からは、木立をうまくよけて飛び立つことができない。そのため、海に向かって開かれた岩場や崖から、あるいは海にむかって開かれた場所を求めて木に登って飛び立つ。その直後、採食地に向かう前に、島近くの海面にいったん着水する大きな群れが見られる（「脚洗い」と呼ばれている現象）。

つまり、オオミズナギドリは、島への出入りの際は、冠島のまわりの磯はあまり関係がないが、出入りの際に、付近の海上に大群で着水する。これが今後、漂流する重油との関連で重要なポイントとなる。

・採食範囲

冠島のオオミズナギドリは、毎日帰島数が異なっており、数日をかけて海上で採食している個体が多いものと考えられる。冠島のオオミズナギドリに標識した個体が繁殖期に回収される範囲は、日本海全域にわたっているが、特に島根県～石川県あたりの回収例が多い（この点の整理が今後必要）。今、仮に冠島から半径200kmの円を書くと、ほぼ中心的な採食圏に関してのイメージを得ることができるのではないだろうか。これは、まさに今回の重油漂流の主要な範囲と重なってしまう。

・渡来時期

オオミズナギドリは、2月下旬に南方海域から冠島周辺海域に渡来する。1990年1月末に丹後半島で座礁したマリタイム・ガ - ディニア号から大量の重油が流れだし、オオミズナギドリへの影響が憂慮されたが、オオミズナギドリが渡来する時期までに重油の流出が食い止められ大事には到らなかった。また、1986年の島根県沖の重油流出のさいも、ウトウなど数千羽の被害をだしたものの、オオミズナギドリが渡来するまでに、重油流出は収まっていた。このように、重油とのからみでは、ここ10年程の間に、オオミズナギドリは2回も助かったのであるが今回は、2000メートル以下に本体のタンカーが沈んでおり、当初流出は無いとの予想もあったが、現実には流出が続いている。

・営巣過程

巣穴は前年から開口したままのものが多く、渡来したオオミズナギドリは、これらを補修し、あるいは巣穴が消失した場合はあらたに掘る。嘴で掘った土を、脚によって開口部から数mの範囲に蹴り出す。巣穴の補修や新たな掘削は在島期間を通して見られる。

交尾期は5月下旬から6月上旬にかけてであり、交尾期間後産卵期までの間にほとんどのオオミズナギドリが帰島しなくなる日がある。この時期は他のミズナギドリ類で新婚旅行期と呼ばれている時期で、産卵とその後の抱卵のためのエネルギー - 獲得の時期と考えられている。産卵期は6月中旬で、雌は約75gの鶏卵大の卵をただ1卵産み、雄が抱卵を開始する。抱卵期間は約53日で、その間およそ1週間交替で雌雄が抱卵する。孵化期は8月上旬・中旬であり、両親は魚の半消化物を給餌する。育雛期間は約80日間で、雛が巣立つのは10月下旬以降になるが、両親が盛んに餌を運んでくるのは10月上旬までで、成鳥は先に渡り

を開始するようである。この時期に雛は既に親の約1.5倍の体重になり、その後体重を減少しつつ正羽へと換羽が進む。

・迷行落下

10月下旬から11月にかけて巣立った幼鳥は次々と離島するが、この時期に近畿地方および福井県で、渡り途中の多くの幼鳥が落鳥し保護されることがある。これらの個体の大半は、各府県の鳥獣保護の担当機関を経て、若狭湾や和歌山県等の太平洋岸で放鳥されている。この点では、京都府や京都市動物園をはじめとする諸機関は、オオミズナギドリの幼鳥の保護の扱いについては、かなりの経験があると言える。また、その関係者も多い。

今までも保護された個体が、標識して放鳥され、パプアニューギニアで生きて再保護された（また放鳥された）といった例もあった。

・標識調査

冠島に渡来するオオミズナギドリの個体群の諸特性を把握するために、継続的な標識調査が行われている（吉田,1981）。標識再捕法により0.6haの調査区間にかかわるオオミズナギドリの個体数は約12000羽であると推定された（須川・成田他,1983）。しかし、0.6haにかかわる個体が、どの程度の範囲を島の中で動くかの調査が完了しておらず、冠島全体にかかわるオオミズナギドリの個体数推定までには至っていない。とりあえず、報道などに流している10万～20万羽という数は、けっして誇張ではないとだけ、ここではしておく。

・冠島オオミズナギドリの保護状況

冠島は、オオミズナギドリの繁殖地として1924年に天然記念物に指定され、舞鶴市がその管理を行っている。現在、学術調査や村の祭りなど特別な目的を持たない限り島内への立ち入りは許可されず、許可を受けていない釣り人などが海岸に上陸することはあっても、営巣地内に立ち入る人はほとんどいない。

漁師は、かつては海上にいるオオミズナギドリの群れによって魚群を知り、また冠島は魚付き林や信仰の島として扱われてきた。冠島周辺の海岸そのものは、サザエやアワビを箱メガネで採り（海女を入れない形に資源管理されている）、また定置網設置の場ともなっており、三浜・小橋・野原の3村によって保護されてきた。

オオミズナギドリそのものは、木に登るなどの変わった習性を持つ海鳥として、あるいは「京都府の鳥」として、さまざまなメディアで紹介されており、オオミズナギドリへの社会的な関心は高い。このように、オオミズナギドリの繁殖地としての冠島の保護は、社会的な理解のもとに、行政的にも厳重に行われており、特に保護上の問題もなかった。

したがって、今回の重油流出は、冠島のオオミズナギドリにとって、最大級の保護上の問題だと言っても過言ではない。

・沓島に関して

なお、冠島の近くにある沓島は、数千番のウミネコの営巣地となっている。また、この島は、少数のオオミズナギドリ、ヒメクロウミツバメ、カンムリウミスズメ（国の天然記念物に種指定されている）の営巣地にもなっている。沓島は冠島と違って、尾根部の一部が木立で覆われていることを除くと一面に裸地または草地である。

- 須川恒, 1993. 魚食性水鳥(ウヤミズナギドリなど)の生態と現況. 関西自然保護機構
会報:14(2):65-72.
- 須川恒・百瀬浩, 1983. 冠島の鳥類. 冠島動・植物調査報告書:12-21. 関西総合環境セ
ンター.
- 須川恒・成田稔・藤村仁・白石昭彦, 1983. オオミズナギドリ個体群の標識再捕法による
分析. 第32回日本生態学会大会講演要旨集.
- 丹信実, 1956. 京都府冠島の生物. 平安学園研論,1:1-113.
- 吉田直敏, 1962. 舞鶴市冠島におけるオオミズナギドリの生態. 鳥,17:83-108.
- 吉田直敏, 1981. 樹に登る海鳥. 汐文社.



研究会の体制について

研究会は、現在5人の幹事による合議で進められています。しかしながら、各幹事は全国に散らばっているため、会報の発行や都内での打ち合わせなど、どうしても個人に集中する部分があります。

現在の会務を列記すると、

- 1.入会登録とデータベースへの入力
- 2.会報の制作
- 3.会報の印刷、発送
- 4.ホームページの更新(現在の入会者は、ほとんどインターネット経由です。)
- 5.一般会計

以上が日常業務となります。

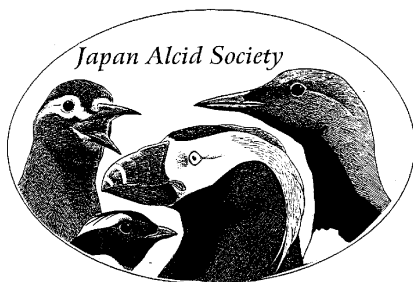
このほかに、今回の油流出事故や助成金による活動などに対しては

- 6.会議、発表会への出席
- 7.作業(書類の作成なども含む)への参加
- 8.特別会計

といった事項が加わります。

現在、会員は130人おり、以前のような体制ではすでにかかなりの無理が生じています。

組織の強化と体制の組み直しが目下の課題ですが、当面、事務手続きを分担していただける方を求めています。みなさんのご協力をお願いいたします。



日本ウミスズメ類研究会

事務局 〒274 船橋市三山2-2-1 東邦大・理・海洋生物内

Phone: 0474-72-5235 / Fax: 0474-72-5236

E-Mail: kojiono@gol.com,

hcb00437@niftyserve.or.jp

URL <http://www2.gol.com/users/kojiono/>

郵便振替 00170-1-580492

口座名 日本ウミスズメ類研究会
